



愛川ふれあいの村 今月の風景

2020年1月 自然のたより

植物の冬芽はそれぞれに特徴があり、目を楽しませてくれます。耳を澄ませば鳥たちの食事の音が聞こえ、ソシンロウバイが甘い香りを漂わせて、なんとも心地の良い気分になります。シモバシラ（氷の花）はこの暖かさの影響か、あまり大きくなりず、降った雪もすぐに溶けてなくなっていました。寒さが苦手な人にとってはありがたい暖かさかもしれませんが、生き物たちはどうでしょうか。例年よりも早く訪れそうな春はどんな表情をみせてくれるでしょう。



ソシンロウバイ



ルリビタキ



ノスリ



トガキの種を食べるメ



トラツグミ



トガキの種を食べるメ



リュウガクサユクイ



セグロセキレイ



池の水を飲むカワラヒワ



カケス



シロハラ



カシラダカ



スイセン



ハタケチャダイゴケ



紅梅

トピックス ★氷の花★

この時期、村の中を歩くと「サクッ」とした感触が足に伝わってきます。冬の風物詩『霜柱』です。見つけると冬の訪れを感じることができますね。実はそんな霜柱と関連のある植物があります。『シモバシラ』という同じ名前のシソ科の植物です。それは村に自生しています。シモバシラは秋になると白い小さな花をいくつも咲かせます。ですが、名前の由来となる最大の魅力は冬に見ることが出来るのです。

シモバシラは地表に出ている部分が枯れた後もしばらくの間、根は活動を続け、地中から水分を吸い上げているのです。ある時、気温が氷点下になると吸い上げられた水分が凍り付くことで枯れた茎に氷の結晶が出来上がります。その姿を初めて見たときは氷で出来た花のようだと感じました。この姿からシモバシラという名前が付けられ、親しまれています。暖冬や気温が高い地域ではなかなか見つけることが難しく、シモバシラを探しに村へ足を運ばれる方もいます。

四季折々の自然の不思議な魅力を感じることが出来ますね。(鎌形) ▼2018年12月30日高取山山頂付近



生き物 ★バランス★

最近、村の地面がよく耕されています。それはイノシシが食事をした痕です。よほど山に餌が少ないか、里山での営みが衰退し野生動物との境界が不明瞭になってしまったのか。

今日では都会でもジビエ料理の店を見かけるようになりました。人が食べることでその数を調整します。野生動物が増え過ぎることで、山の餌を食べつくし民家近くまで餌をさがしに来なくてはならない状況がうまれます。

生態系は生物数のバランスを保ちながら安定していくはず。野生動物とうまく付き合っていくためにはどうしたらよいでしょうか。(石川)



旬 ★ナズナ★

春の七草の一つである『ナズナ』は、利尿作用や解毒作用、止血作用があり、胃腸の調子を整えてくれる効果があります。日本各地のどんな土壌にも生える越年草であることから、冬の貴重な作物や薬草としても重宝されていました。

また、果実の形が三味線のバチに似ていることから、別名『ぺんぺん草』とも呼ばれています。子どもの時、果実の部分を下側に折り、茎を回転させて出る音で遊んだことを思い出しました。ジャラジャラというなつかしい音がよみがえります。(佐々木)



サヤゴケの蒔美しく来月の見どころ
葉を落としたイチヨウ並木は何となく寂し気だ。旋回していた小鳥の群れが一斉にその枝にとまった。双眼鏡で見ると、尾羽の切れ込みでカワラヒワと分かった。キリキリココロと鳴く様子でカワラヒワと確信した。カワラヒワが飛び去ると、急に静寂が戻った。ふとイチヨウの樹幹を見ると、小さな塊のコケの中に赤いものが見えた。ルーペで見ると、赤い花のように見えるのは十六本の蒴歯で胞子の入った蒴の蓋をしているが、条件が良くなるとこのように蓋を開き胞子が飛んで行く。ふれあいの村では、ソメイヨシノやメタセコイアやマツ等の樹幹に着生している。サヤゴケの名の由来は葉が乾くと蒴柄に沿って鞘のようにくっついて見えるため。また葉の中心にある中肋は葉頂まで届く。樹幹着生のコケ類はその栄養を樹木から貰っているのではなく雨粒や大気から貰っている。その地域の環境指標植物として優れている。暖かい服装で日頃見ないコケ類を観察してみてください。きつとその美しさと不思議さに驚くことのでしよう。(吉田)

